

エンターテインメントの本質

～ウォルト・ディズニーが愛した夢の世界とは～

近藤夏美 中村理佐 山口若菜 山田彩加 吉村美貴子



はじめに



日程



近藤レポート



中村レポート



山口レポート



山田レポート



吉村レポート



おわりに



はじめに。

【研究テーマ】

エンターテインメントの本質 ～ウォルト・ディズニーが愛した夢の世界とは～

【目的地】

アメリカ合衆国・・・ロサンゼルス・サンフランシスコ・アナハイム

☆ 研究旅行の目的

「エンターテインメント」とは何か。エンターテインメントは私たちにとってどのような役割や可能性を持っているのだろうか。今日、エンターテインメントは私たちにとって必要不可欠なものにまでなっている。そこでエンターテインメントの本質を探るために、ウォルト・ディズニーに着目したい。なぜなら彼はアニメーション制作からディズニーランド建設まで生涯を通じて人々を楽しませるということに徹底的にこだわった完璧主義を貫き、今でもエンターテインメントの王者として君臨し続けているからだ。ウォルト・ディズニーは亡くなった今もなお世界中の人々に夢を与え続けている。その彼が生きている間に唯一完成まで直接手掛けたものが、カリフォルニア州アナハイムにある Disney Land Resort である。そこにこそ、彼が生涯描き続けた理想のエンターテインメントが実体験出来る世界がある。ロサンゼルスはほかにもディズニーの歴史や資料が展示されている Disney Family Museum、幾多の名作を生んだ Disney Studio 等を擁し、ディズニーに最も縁が深く、彼の精神を学びとるために欠かせない地である。ロサンゼルスはディズニーの中心地であるばかりではなく、映画産業やスポーツなどエンターテインメントの中心地でもある。この土地特有のカラーやオリジナリティはディズニーがこの地を選んだことと無縁ではないだろう。エンターテインメントとは人を楽しませることであり、自分が実際にそこで楽しんでこそディズニーのエンターテインメントの秘密が見えてくるはずだ。事前にディズニーの生涯や彼が目指したエンターテインメントの在り方を調査し、日本のディズニーランドの分析も行うことで、現地での調査と実体験をより実り豊かなものにすることができる。以上を踏まえて、ディズニーのエンターテインメントの精神を明らかにし、その本質に近づくことが本研修旅行の目的である。

☆ 期待される成果

ウォルト・ディズニーは世界中の人々にアニメーションの楽しさを教え、映画を通じて夢を与え、それらの集大成としてテーマパークを作り、夢を形あるものにした。そこから生まれたエンターテインメントは今もなお人々に感動や興奮を与え続けている。ウォルトの創造力と実行力、エンターテインメントに対する考え方は尊敬に値する。私たちが彼から学べることはなお多く、特に彼が構築したサービス、ホスピタリティ、クリンネスの精神は徹底されたもので、それらの精神を肌で感じ理解することでこそエンターテインメントの本質に近づき何か見えてくるものがあると考えます。

また、私たちは3月に起きた大震災の際に、少しでも心の傷を癒し、新たに前を向くための力を与えることができるエンターテインメントの役割の大きさを実感し、その重要性に改めて気付いた。エンターテインメントを見つめ直すことによって、それがただ人を楽しませるだけのものではないことを明らかにし、今までとは異なった考え方を提示したい。

現地では今まで国際文化学部で学んできた文化的多様性の重要性を人々との交流や実際の体験を通してより意義深いものになりたいと考える。さらに、私たちはアメリカ文化コースと表象文化コースの知識や考え方を生かし、それぞれ異なる観点から受け止めたものを分析することができる。そしてその結果を共有し統合することでより理解を深め、そこから研究分野の方向性を各自が明確にできればと考えている。現地で発見したこと感じとったことは、帰国後の成果報告のみならず、レポート、さらには卒業論文を通して多くの人に発信していきたい。

◆研究旅行日程表

出発日	2011年 9月2日	旅行日数（発着日含む） 10日間
帰着日	2011年 9月12日	
	滞在地	行動・調査内容
第1日目	福岡 ロスアンゼルス	移動日：福岡発→成田国際空港→ロスアンゼルス国際空港 ホテル到着後、全体の予定を再度確認。また、事前に調査しておいた移動手段で間違いないか確認。
第2日目	サンフランシスコ 〈移動手段 電車〉	ウォルト・ディズニー博物館： ディズニーの生涯と業績をホームビデオや、写真、彼のノートなどを実際に見て情報を収集。
第3日目	ロスアンゼルス	ハリウッド： ハリウッドミュージアムで映画制作の舞台裏を体感し学ぶ。ハリウッド周辺を散策し、観光地を巡る。
第4日目	ロスアンゼルス 〈移動手段 地下鉄〉	ダウンタウン： 現代美術館 MOCA、ウォルト・ディズニー・コンサートホール、LA ライブなどダウンタウンに集まるエンターテインメント施設を散策。
第5日目 第6日目	アナハイム 〈移動手段 車〉	ディズニーランド・パーク&ディズニーカリフォルニアアドベンチャー： ウォルト・ディズニーが作り上げた世界を実体験する。その際、日本の東京ディズニーランドの雰囲気、仕組みなどを考慮に入れつつ、調査。また、個人個人が掲げている探求したい内容も調査。
第7日目	ロスアンゼルス	集めた資料、メモなどを参考にエンターテインメントの本質を5人で話し合い、情報と考え方を共有し、批判的に検討。
第8日目	ロスアンゼルス	個人旅行
第9日目 第10日目	ロスアンゼルス 福岡	移動日：ロスアンゼルス国際空港→成田国際空港→福岡空港

色彩的観点から見るディズニーランド

国際文化学部

近藤夏美

はじめに

ゼミのレポートで色彩について調べたとき、色彩が持つ様々な力に興味を持った。普段何気なく暮らしている中で視覚から得る情報が最も多く、そのため私たちは無意識であっても生活の中の色彩は大きな影響力を持つことを知った。

夢の国と言われ、開園から何十年も経った今なお毎年何万人もの入場者数を記録し人々に愛され続けているディズニーランド。エンターテインメントに対するこだわりが非常に強く、様々な点で細部まで徹底して管理が行き届いていると有名なディズニーランドにおいて、色彩に対するこだわりとはどのようなものだろうか。アナハイムのディズニーランドにとっての色彩の果たす役割はどのようなもので、それがディズニーランドのコンセプトやエンターテインメントにどのような影響を与えるのだろうか。以下では、それらを東京ディズニーランドとの比較も踏まえ考察したい。

World of Color におけるにおける色彩

World of Color とは世界でここカリフォルニアのみで行われているショーである。この World of Color とは1200個もの噴水から作り出した霧をスクリーンにしてアニメーション映像を映し出す、光と水のエンターテインメントショーである。まず音楽に合わせてたくさんの噴水があがり、左右に動き、色とりどりのライトを当てたカラフルな噴水ショーが始まる。たくさんの細かいジェット噴水が躍ると同時に水で造られたスクリーンに映像が映し出される。リトルマーメイドやファインディング・ニモ、アラジン、トイストーリーなどたくさんの歴代のディズニー映画の人気登場キャラクターたちが次から次へと水のスクリーンに現れる。また、霧の中にキャラクターたちが浮かび上がって動き出したり、噴水全体が巨大な津波のような表現をしたり、本物の炎も使ったの真っ赤に燃え盛る演出、シマウマの大群がこちらに押し寄せてくるシーンなど、どれも迫力満点の映像・演出が盛りだくさんで、夜の暗闇の中で3D映画を見ているかのように錯覚するほど鮮明で美しいショーである。

映像と水の動きはもちろん、ジェット噴水、照明、時には炎さえもが音楽に合わせて次々と踊り、暗くなった園内に明るく広がるとき、観客席では人々の顔にきらきらとした笑顔が浮かぶのが見えた。



1 これらは空中に造られる水のスクリーンに映し出された映像なのだ。

これほどこのショーが美しいのはやはり夜の闇があつてのことだろう。光はその背景に闇があることでよりはっきりと知覚される。このショーが昼間に行われても意味がないのだ。夜の闇の中に美しい映像、ライト、炎が浮かび上がるからこそ鮮明な印象を植え付ける。また、ここカリフォルニアアドベンチャーパークは日本のディズニーシーに近い位置づけで、園内の中央には大きな池のようなものがあり、たくさんの水がある。そのためこれほど膨大な水量の使用と大規模なセットを組むことができ、それによって初めて可能となるショーであるのだ。

終末部では特に壮大な演出がなされ、クライマックスは何十、何百もの噴水が音楽に合わせて勢いよく吹き上がり、水のカーテンの背後にある観覧車やジェットコースターもともに綺麗にライトアップされ、非常に壮大で幻想的なショーの終焉であった。みんなが盛



2 World of Color のクライマックスシーン

大な拍手を送り笑顔で帰っていく。このようにショー的要素の強いサービスの中心にあるのは色彩の体験だろう。そして、観客が家に帰ってから何か月も、何年も、その経験を語り続けるならば、それは色彩の思い出とともに語られるだろう。やはり色彩を中心にしたショーほど人々の心に最高の瞬間の記憶を残しうるエンターテインメント性の強いものはないだろう。

このショーのイントロ部分に使用されている曲は、アメリカで1960年代に9年間に渡り日曜の夜に放送された Walt Disney's Present Wonderful World of Color というテレビ番組のテーマ曲である。この Walt Disney's Present Wonderful World of Color が放送された当時は、ちょうどカラー放送が始まった頃だったので、ディズニーの映像を鮮やかな色で届けようというコンセプトで放送された可能性もある。本来ディズニー提供の番組は、ABC という放送局で放送されていたのだが、ABC

はカラー放送の技術に遅れをとっていたために、他局のNBCで放送となっただけであり、このことからカラー放送へこだわったディズニー社の気概を感じるうえ、色彩を提示することが彼にとっていかに大切だったかが理解される。このように新しきものの中にも古きものを大事にするというところが、ディズニーが世代を超えて長年に渡ってファンを生む秘訣なのかもしれない。

メインストリート USA における色彩

世界に初めて出来たディズニーランドであるディズニーランドパークの入場ゲートを越えるとまずそこにはディズニーランド鉄道のメインストリート駅がある。おなじみのミッキーの顔の形の花壇があるのがここだ。



3 入場ゲート側から見たメインストリート USA 駅

メインストリート駅を超えるとメインストリート USA だ。年中雨が少なく天気がよいカリフォルニア、アナハイムのディズニーランドでは明るく強い色彩が使われているのではないかと考えていたが、メインストリート USA には全体的に少しくすんだような茶色っぽい色遣いの建物が多かった。どの建物も茶色、ベージュ、アイボリーのような色を基調としていた。メインストリート USA はウォルト・ディズニーの生まれ故郷であるマーセリンの街並みをモデルとしており、19世紀末～20世紀初頭の世紀の変わり目の『古き良き時代のアメリカ』をイメージしているようだ。そのため色彩だけでなく、建物や音楽までも当時のアメリカの雰囲気を醸し出すように設定されているのだ。



4 メインストリート USA の建造物(日本とは違い降水量が極めて少ないためすべて屋外)

ではこの古き良き時代のアメリカとは何か。その文化によって厳密には異なるが、ここでは西部開拓時代を指すのではないだろうか。西部に行けば一攫千金で成功できると思えた、何か悪いことが起こっても保安官が解決してくれるに違いないと思えた、いわゆるアメリカンドリームに満ちていた時代だ。当時ヨーロッパ人がアメリカに移住してきたのに伴いアメリカにヨーロッパ文化がたくさん入ってきた。建築においてはヴィクトリア様式が当時非常に流行したため、メインストリート USA もヴィクトリア様式で建設されている。

最初はメインストリート USA のややくすんだ色彩が古き良き時代のアメリカを表象しているという印象を持ったが、単にそうではなくこのヴィクトリア様式の建築方法、色彩こそが活気に満ちていた古き良き時代のアメリカを彷彿とさせるのだ。風土色的観点から見ても一軒一軒の色は異なっても全体的な雰囲気をもとめることによって、美しい景観が形成され、普遍性かつ多様性の中にある統一性を生み出していると言えるだろう。

メインストリート USA はウォルトが生まれ育った時代、場所をここに再現することでウォルトの精神や、彼が建設当初目指した大人と子どもの両方が楽しめ、謝肉祭の悪い側面を取り除いた恒久的な娯楽施設が現代世界に上手く共存することを可能としている。

このメインストリート USA がディズニーランドを訪れた人みんなが最初に目にする通りだということがまた重要だ。メインストリート USA は世界各地のディズニー・テーマパークに存在し、ゲートをくぐり必ず最初に通るように設計されている。そうすることで、すべての人々に古き良き時代のアメリカにタイムスリップしたかのように錯覚させさせているのだ。

東京ディズニーランドとの違い

全体を通して、パーク内の建物やアトラクションの外観はもっと派手でポップな色味を期待していたが、全体的に淡く落ち着いた色味が多かった。メインストリート USA と東京ディズニーランドのワールドバザールの色彩は似ていてこれは世界のディズニーランドに共通で使われている色彩と言えるだろう。しかし、東京ディズニーランドはエリアごとに地面の色が違い、自分が今どのエリアにいるかわかるようになっているが、アナハイムで

はそういう工夫はないようで、ほとんど茶色っぽい同じような色の地面だった。また、it's a small world も日本と異なり、日本では暖色系を基調とした鮮やかな外観だがアナハイムでは白を基調としたシンプルで清潔感のある外観であった。

なぜこれらの差異が生まれたのだろうか。ここには建設された時代とコンセプトの違いがあるのではないだろうか。アナハイムは世界で最初に建設されたディズニーランドであり、1955年開園だ。一方東京ディズニーランドは1983年開園のため、アナハイムより洗練され、よりゲストに気持ち良く楽しんでもらえるような工夫が凝らされたのではないだろうか。アナハイムの建設時にはわからなかったこと、オープンしてからわかった問題点が東京ディズニーランドでは改良された。ゲストが意識しない細部まで趣向を凝らし改良し続けていくことがディズニークオリティなのだ。

またアナハイムのディズニーランドのお城は眠れる森の美女の城をシンボルとしている。東京ディズニーランドはフロリダのマジックキングダムの子守歌のシンデレラ城を手本とし忠実に再現したため、色も形も大きさも全く異なるものとなっている。it's a small world はすべてのディズニーランドにあるが、それぞれ外観が大きく異なる。アナハイムと東京は建築自体は比較的似ているが、何度も色の塗り替え作業が重ねられている。そのため現在は暖色系と白系と大きく異なる色使いであるが、今後また塗り替えられるともっと異なるかもしれないし、そっくりになる可能性だってあるのだ。このように様々な変遷を繰り返しながら、ディズニークオリティはより一層進化し続けている。

おわりに

ディズニーランドを色彩の観点から考察すると、遊びに行くときにはわからない様々な趣向やこだわりが気づいた。アナハイムと東京に同じ点もあれば、ディズニーランドというイメージにそぐわない程度で変更が加えられている点もあり、その土地柄や客層、気候等も考慮されディズニーランドは改良を続けている。そうやってよくよく目を凝らせば各地のディズニーランドでオリジナルカラーがあるのだ。しかしどれもがディズニーランドに違いなく、人々がディズニーランドに抱くイメージはほぼ万国共通のものと言えるだろう。普段あまり色彩を特別に意識することはないが、背景にある情報として入ってくる色彩が知覚において重要な役割を果たしているのは間違いない。おそらくディズニーランドは、色彩がもたらす効果が非常に大きいことを利用して、私たちが無意識であっても、ディズニーランドの様々なイメージを構成することを狙っている。それはゲストみんなに同じ印象を与えるためのディズニーランドの色彩戦略なのだ。

色彩について興味を持ってディズニーランドへの旅だったが、日米のディズニーランドの違いやディズニーランドにおける色彩についてのみならず様々な点でも日米比較をすることができた。予想に反することも多くあったが、自分の目で体験することを通してその理由をはっきりと知ることができた。これからは研修旅行の体験と本考察を踏まえて、今後の研究課題をより細かく定め、卒業論文作成に生かしていきたい。

エンターテインメントの本場で見たもの

13AR183 中村理佐

はじめに

「エンターテインメント」とは、「もてなす人」と「もてなされる人」がいることによって生まれる「娯楽」である。エンターテインメントは、人々を楽しませたり、感動や刺激を与えたり、私たちの心を豊かにしてくれるものである。

私自身は小さいころから様々なダンスを習い、踊って自分を表現することが好きであった。大学ではダンスサークルに入り、またソフトバンクホークスのダンスチームとして活動している。エンターテインメントショーは自分のなかでダンスの延長線上にある。ダンスを通して得られる感動や充実感は何にもかえられない価値がある。ショービジネスに関わっている人々も感動の日々を過ごしているはずである。

日本国内にも数多くのエンターテインメントショーが見られ、何度も見に行ったことがある。日本の古典文化である歌舞伎や能は少し難しい気も正直あるが、前もってストーリーを勉強していくと、やはり日本文化を誇らしく感じるができる。また、東京ディズニーランドやユニバーサルスタジオジャパンなどのエンターテインメントテーマパークでは、パーク内にいる間は現実から離れ、幸せな気持ちになれる人が多いだろう。日本にいながらアメリカの巨大テーマパークを満喫でき、一日中遊んで疲れたとしても、それは心地よい疲れであり、ストレス発散もでき、頑張れる力をもらえる。よく言われる日本らしい光景がアトラクション前の長い行列、行き届いた細やかなホスピタリティー、パーク内での清潔感などである。

はたして本場アメリカでは私たちをどのように迎えてくれるのか。いったいどんな感動や精神と出会えるのか。

アナハイムのディズニーランド

数あるテーマパークの中で、ディズニーランドはエンターテインメント性という点で単なるアミューズメントパークの域を越えている。ディズニーが一貫して大切にしている「夢の世界」というテーマが徹底されており、訪れた人たちの心をつかむ。リピーター率は9割以上と言われている程である。今回の旅で私たちが訪れたカリフォルニアのアナハイムにあるディズニーランドリゾートには、ディズニーの生みの親ウォルト・ディズニーが自ら構想・指揮して誕生したディズニーランドパークと後に完成したカリフォルニアアドベンチャーパークという2つのテーマパークに分かれている。

世界中の誰もが認めるエンターテイナーであるウォルトが直接手掛けた夢の空間。私たちはここで彼が思い描いていたエンターテインメントの世界を体験し、実際に楽しみ、彼

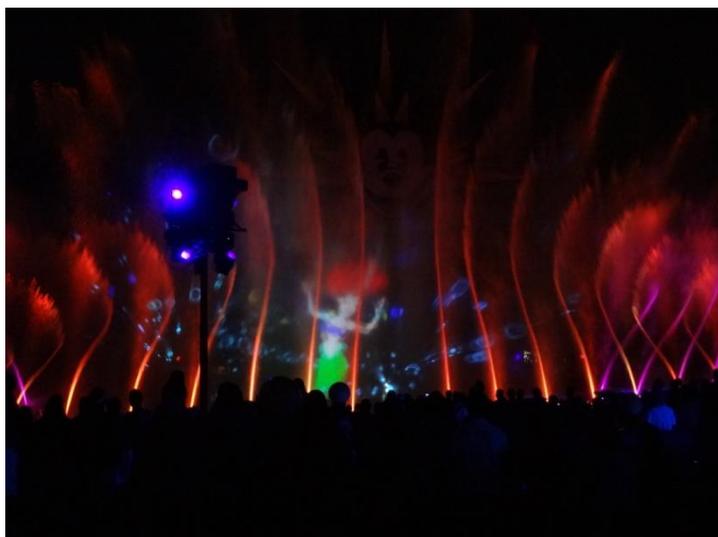
の人々を楽しませようとする精神に触れることができた。

ここからは、今回の私の研究課題であるエンターテインメントショーについて述べていきたい。エンターテインメントショーは「もてなす人」（表現者）と「もてなされる人」（観客）が同じ時間と空間を共有することによって価値が見出されるものであると考える。ディズニーランドで行われている数々のエンターテインメントショーは、ディズニーが私たちに届ける「夢の世界」を五感で感じ、楽しむために作られている。

今回は2つの違った種類のエンターテインメントショーを見ることができた。

World of Color

2010年にDisney California Adventureで始まった比較的新しいスペクタクルショーである。ドラマチックな音楽にあわせ吹きあがる噴水にカラフルなライトアップが幻想的な雰囲気を作り出す噴水ショーだ。噴水で作成した霧をスクリーン代わりにディズニー作品の名シーンが映し出され、ディズニーの世界を生き生きと感ずることができ



噴水のスクリーンに映る映像

る。このショーは、ウォルトがカラーテレビへと移行した当時に制作した "Wonderful World of Color" という番組がショーの元になっている。

このショーの魅力は、日常ではなかなか味わうことのできないスケールの大きさである。世界最大のウォータープロジェクトスクリーンに空中約 60m まで高く吹きあげる噴水や炎、無数のレーザーなどの迫力は言葉では言い表せられない程であった。ショーはリトルマーメイドやファインディング・ニモといった陽気な音楽とカラフルな噴水で表現された水の世界から始まる。曲調に合わせて次々に変化を遂げる光や噴水に圧倒されは自然とその世界に引き込む。最近のディズニー作品から昔から親しまれている作品が映像と音楽、光と水の動きで表現されていて、シーンが変わるたびに客席から歓声が沸き上がっていた。

様々な演出がたくさん組み込まれており驚きの連続で飽きることなく 25 分間のショーはあっという間に終わってしまった。クライマックスに向けての盛り上がりは、こちらに襲い掛かってくるような迫力があり、とてもダイナミックで力強く感動的であった。終わってからも心地よい音楽と淡い照明でライトアップされた空間で多くの人々がショーの余韻を味わっていた。

力強くまっすぐ吹き出たり、波のように優しく揺れたり、様々な形で表現する噴水に光で色を加えることにより表情がつく。さらに音楽に合わせることでそれぞれのシーンの世

界観がより伝わってくる。噴水、光、音、これらが共演し、非日常的な空間を創り出すことによって、見ている人々はディズニーの「夢の世界」を生きることができるのである。

Disney's Aladdin A Musical Spectacular



アラジンをイメージした舞台装置

2000名収容の大型劇場「ハイペリオン・シアター」で上映されるディズニーの人気映画「アラジン」を舞台化したミュージカルである。古典的な劇場を思い出させる壮大な舞台装置や凝った演出の本格的なミュージカルで上映時間は40分程度であった。

ミュージカルとは、簡単に言うと、芝居だけでなく歌とダンスを合わせてストーリーやショーが進む、舞台芸術の一種である。

ミュージカルでは歌も台詞の一部であり、登場人物達が歌ったり踊ったりすることで、ストーリーの進行や、登場人物の心情や感情、舞台上の世界が表現される。ただ現実のやりとりのように台詞が展開されるよりも、歌と踊りを用いることで、視覚や聴覚によっても観客の心に訴えかけることができるのがミュージカルなのである。芝居、歌、ダンスが一体となって劇的効果を高めているのだ。特にミュージカルにおいてダンスは物語の進行上、演出上重視されている。ダンスは、役柄や感情を表現できる重要な構成要素となっているのである。

「アラジン」の世界を忠実に再現していて、現実的に表現が難しそうなシーンも工夫して表現されていた。生きているかのように動く絨毯は人が演じており、ジーニーが魔法を使って飛び回る場面ではジーニーの分身がたくさん出てくるなどミュージカルならではの演出で楽しませてくれた。また劇中に象に乗ったアラジンが客席の通路を歩いて回るシーンや、魔法の絨毯に乗ったアラジンとジャスミンが客席の真上を飛ぶ演出は会場と一体化していて素晴らしかった。

魔法のランプから出てくるジーニーの演技と多彩な表情はとても印象深く、誰もが彼の世界に引き込まれていた。ただ演じるだけでなく観客の反応をうかがってジョークを言って笑いを誘ったりするのは、あまり見たことがなかったのでとても新鮮に感じた。これは人が演じているからこそできることである。このように観客を楽しませようという心遣いがいっぱい見られる頼もしいステージで、英語を完全に理解しなくても楽しめた。

このショーでは、パフォーマンスしている人たち一人一人が輝いていて、熱意のこもったパフォーマンスに感動した。観客を楽しませたり、感動させたり、人間が生で演じるエンターテインメントは伝わり方が違うと改めて実感することができた。

ディズニーランドのエンターテインメントショーは日常から離れることで、ウォルトが描き続けている夢の世界を逆にリアルに提示するものだ。ウォルトが残した人々を楽しませたいという思いが今も受け継がれ、私たちに非日常的な空間を提供してくれる。エンターテインメントショーは日常では味わえない様々な気持ちを提供し、刺激を与えて、心を豊かにしてくれるものなのである。

今後に向けて

アメリカのエンターテインメントの場で強く感じたことは「もてなされる人」はその世界に完全に身をゆだねてひたすら楽しんでいることである。周りを気にせず大声をあげて、自分から一緒に楽しもうとしている。街中でも好きな時に歌ったり踊ったり、毎日を楽しんでいる人々で溢れていた。

しかし、みんながみんな楽しんでいるわけではないと思うような光景を街中で目の当たりにして私のなかで小さな疑問が浮かんだ。何かに気づいてなかったのではないかという疑問であった。本場のテーマパークに飽きたのではなく、感情が薄れてきたのではない。平和で自由な国に生まれ、頑張ればそれなりに充実した大学生活を過ごしているのは当たり前なのか？好きなエンターテインメントの世界をあれこれ見て感動できるのは当たり前なのか？自分にとって今までとは違う種類の疑問がふと浮かんだ。

好きなことがあり、そしてそれを頑張って追い求められる環境にあることは決して当たり前ではなく、その環境があることが幸せであると気付いたと同時に周囲にもその責任を果たせる自分でありたいと思った。自分の行動で周囲の人々が心地よかったり、元気が出たりするなら、それは幸せなことである。エンターテインメントの表面的な華やかさの裏にある決して当たり前ではない恵まれた環境は、エンターテインメントをより人を楽しませるものにする、エンターテイナーとしてその責任を果たすための重要なきっかけなのだ。

この気持ちを忘れずに、今後は、エンターテインメントを「もてなす人」としてエンターテインメントの本場で感じた感性を大事にして最大限に活かしていきたいと思う。パフォーマンスを通して人の心を動かすことはもちろん、常に自分自身が楽しんで感動することを忘れないでいたい。

ディズニーにおける共存

◎個人の研究課題

山口 若菜

今回この研究旅行制度において個人の課題として取り上げた点は、ディズニーにおける共存である。今後、卒業論文を書き進めていく上で私がテーマとしているのが「アメリカの同性愛について」である。日本では同性愛はアメリカと比べて多少偏見があるのが現状。また、アメリカも同性愛に対して全く偏見がないのかと言えば、そうでもない。ディズニーにおいては物や動物が話をしたり、人間と動物が恋に落ちたりする。このディズニーという世界は生物や物すべてのものが分隔たりなく共存し合っているのである。それはキャラクターだけに限らず、実際行われているディズニーのショーにおいても様々なデザインが共存し合いながら一つのエンターテインメントとして成り立っている。

世界中の人々がこの世界観に魅了され自然とこの世界に入り込んでしまう。なぜ私たちは同性愛への偏見があり、ディズニーは偏見なく受け入れることができるのか。ウォルトディズニーが作り上げた世界を実際に見て彼の精神を感じ取ることによって今後の卒業論文の視野をより一層広げようと考えた。

◎カリフォルニア・ディズニーランドは「パーク」と「アドベンチャー」の二つに分かれている。これから、それぞれについて私が注目した点を紹介していきたい。

DISNEY CALIFORNIA ADVENTURE PARK



ディズニー・カリフォルニア・アドベンチャーでしか味わえないものがアラジンのショーである。園内のアトラクションでもあまり並ぶことが少なかったが、このショーにおいてはたくさんの観客が列を作っていた。もちろんショーはすべて英語。しかし、ショーの流れはアラジンと魔法のランプを再現したものだったため、英語が聞き取れなかった部

分もおおまかに理解することはできた。ショーにおいてはキャストの演出、表現の豊かさや劇場内の効果音、背景すべてのものが、想像していたものをはるかに上回っていた。ショーに出てくるランプの精や空飛ぶじゅうたんもリアリティーさが追究されており、ショーの途中、本当に上空をじゅうたんが飛ぶ演出もあり、劇場内は驚きに包まれるような場面もあった。様々なデザインのプロットが一つのエンターテインメントとして成立していることは「それぞれ異なるものが異なるままでいい」、「いろんなスタイルがあることで世界が一つになる」ということを伝えているようにも感じた。

そしてもう一つ注目したのは、アドベンチャーで行われる夜のショー『World of Color』である。噴水で作られ霧をスクリーン代わりにしてアニメーション映像を映すというエンターテインメントショー。幻想的で膨大なスケールで行われる豪華な噴水のショーである。三十分ほどあるこのショーは、決まったエリアで見ることができるファストパス機能も完備しており、このファストパスがあるかないかではだいぶ違った。私たちは開園と同時にこのファストパスを手に入れたので、ショーはファストパスのエリア内で見ることができた。



音楽にぴったりと合って吹き出してくる噴水と共にカラフルなライトやディズニー映画の映像が組み合わせり、まるで万華鏡の中にあるようなカラフルなイメージの世界を冒険しているようだった。また、出てくるディズニーの映像に合わせて音楽もライトアップも水の吹き出方もすべてがまるで違っていた。吹き出してくる噴水の長さもそれぞれが違なり、

噴水全体が巨大な津波のような表現もできれば、途中リアルな炎が使われ、真っ赤に燃え盛るシーンもあり、迫力満点のショーが演出されていた。私たちは比較的遠い場所からショーを見ていたが、炎の熱気は私たちのところまで伝わってきた。最後は世界のリズムが一つの海に集まり、一つの音楽を奏で壮大なエンディング。ショーが終わると同時に会場全体が大きな拍手と喝采に包まれていた。この余韻はしばらくの間消えることなく、今もなお私の中で忘れられない映像として焼き付いている。

時には水は光を引き立たせ、時には光は水を引き立たせる。水と光が一緒になった時、音楽が組み合わせって一つの世界を作り出す。どれも一つ一つの役目を果たし、かわるがわる互いを強調し合っていた。水と光と音楽が共存することでこんなにもすばらしい世界を生み出すことが出来るということに深く感動し、このようなショーを生で見ることが出来たことに感謝したいと思った。

DISNEYLAND PARK

ディズニーランドパークの中にある” It’s A Small World” というアトラクション。ボートに揺られながら、ヨーロッパからアジア、アフリカ、中南米、南太平洋へとミニ世界一周旅行をする旅。世界各国の民族衣装を着た子供たちの可愛らしい人形が、それぞれの民族



衣装姿でテーマソングである” It’s A Small World” を歌っている。この” It’s A Small World” を日本語では「世界はひとつ」と訳しているが、” It’s A Small World” とは、英語の日常会話によく出てくる慣用句で、「世間は狭い。」というのが本来の意味である。これと、小さな子供たちの世界や短時間での世界一周旅行の趣旨を合わせて付けた結果が” It’s A Small

World” という命名だといわれている。

このアトラクションから世界は狭いと考えさせられることはたくさんある。世界はたった一つの月と太陽があるだけで、森があり、壮大な海があるがだけで、今では飛行機があれば世界中どこへでも行くことができるうえ、自宅に居ながらテレビやネットで地球上のことを把握でき、電話ですべての大陸の人々といつでも話ができる実に小さな世界なのである。世界中の子供たちが私たちに微笑みかける笑顔を見ていると地球上すべての醜い争い事が本当にちっぽけに思えてきた。



終点近くになると、人形たちの民族衣装の色がすべて白になっていた。これは世界中の民族は一緒だという演出なのかもしれない。出口から出てくる人たちは皆一応に何ともいえない優しい顔になっているのがこのアトラクションの素晴らしさを証明している。

まとめ

カリフォルニア・ディズニーでは、日本にある東京ディズニーランドでもなく、ディズニーシーでもない、ここにしかない雰囲気やショー、乗り物をたくさん堪能することができた。



全体を通してパークもアドベンチャーもエリアごとに分かれたテーマに沿ってたくさんの工夫がなされていたが、それぞれエリアのジャンルは全く違うもで、新しいエリアを回ると異世界へ足を踏み入れている感覚だった。カリフォルニア・アドベンチャーにおいては、ウォルトディズニーの死後に製作された場所だが、彼が活着している間に製作されたフロリダにあるもう一つのディズニーリゾート地ウォルトディズニーワールド (WDW) をイメージして造られたものである。

彼が WDW を制作する上で表現したかったのは自然と人間が共存できる理想的な未来都市。彼は同じ敷地内に大自然のエリアと未来都市を作り上げることで未だかつてない、これらが共存する夢の世界を描いたのである。このウォルトの精神は今もなお引き継がれ、進化し続けているのである。

ディズニーというテーマパークは人間と自然の共存を表している。ここは過去・未来と時間の軸でさえ共存している。様々なエレメントがそれぞれを主張しているにもかかわらず、きちんと一つの世界として成立している。ここに平和という言葉が大きく現れているようだった。

私達人間は、自然を破壊したり、動物を殺したり、自分たちの好き勝手に地球を痛めつけてばかりいる。今回、ウォルトディズニーの精神を知るとここで、「自然と共存」

しながら生きていく。このような当たり前の事が一番出来ていない生物は人間なのではないかと思った。私たちはディズニーという世界を見習わなければならない。そして、私た



ちはもっと謙虚に生きるべきではないだろうか。ディズニーという世界がある限り、いつかきっと私たちの世界にも偏見がなく、平和でみんなが手を取り合い微笑みあう日がくるような気がした。

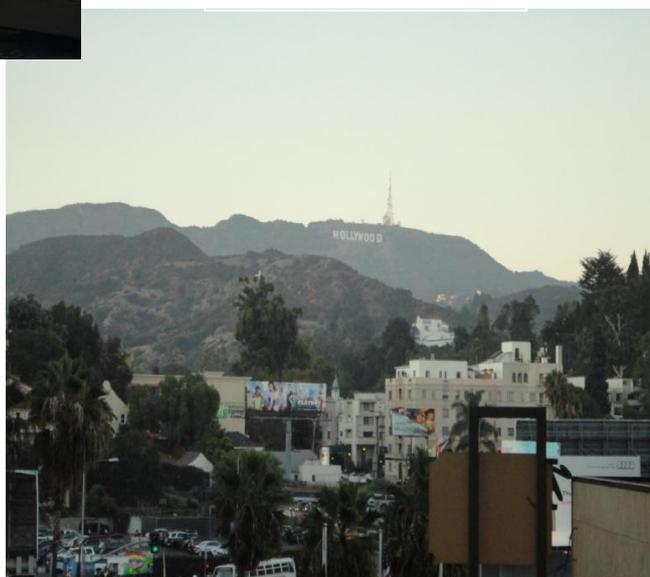
Hollywood の街中



今回の研究旅行ではディズニー以外でも学んだことはたくさんあった。ロサンゼルスという世界の大都市を訪れたことは私の人生の中でも偉大なる経験となった。人種のるつぼとも言われるだけあって街を歩いている人々は様々な人種の人ばかり。しかし、様々な人がいるにも関わらず一つの国が成り立っている。これはディズニーの世界観とも似ていると思った。

Hollywood サイン

また、街中で堂々と男性同士で手を繋いで歩くカップルを目撃した。しかし、周りの人たちはまったく彼らを気にしていなかった。気にしていたのは私ぐらいだったのだろうか。アメリカは同性愛に対し寛大な国だと知っていながらも実際に見てみると私にとっての衝撃は大きかった。他にもコスメティックショップで働く女性のような男性や男性だがしぐさは女性など様々な人がいた。私たちが滞在していたハリウ



ッドやその近くのウエストハリウッドには住人の三分の一がゲイまたはレズビアンだという。ここ周辺にはたくさんのゲイのコミュニティーがあったが、年齢や性別の制限があった為、私は入ることが出来なかったのがとても残念だった。しかし、今回のこの経験をもとに、卒業論文の研究範囲も広がり、実際に見て感じ取ったことを今後の論文作成に行かせることは大きな収穫となった。また、このような貴重な経験をさせて頂いたことに感謝したい。今回の旅行に関してお世話になった先生方、本当にありがとうございました。

山田彩加

『ディズニーランドから学ぶホスピタリティ』



● 研究概要

私は元々、人と接することが好きで、大学に入ってから今まで、接客のアルバイトをしている。その中で接客という仕事が楽しく、やりがいを感じるとともに、難しさも感じている。お客様は本当に様々で、マニュアル通りの接客をしては全てのお客様を満足させることはできない。ウォルトはかつて、日常性を完全に遮断した別世界空間を造り続けるために、キャスト（従業員）たちの人材育成にも力を注いだ。そして、そのおもてなしの質の高さは、並はずれたものがある。ディズニーランドの接客の素晴らしさに関する本も、数多く出版されているくらいだ。また驚いたことに、キャストの8割～9割がアルバイトなのである。ただの小遣い稼ぎ程度でアルバイトをしている学生も多いなか、ディズニーランドのキャストたちは、本などに書かれるくらい最高の接客をしているのである。将来も、人と関わる仕事に就きたいと考えている私は、「世界一」と言われるほどの接客を学びたいと思い、ディズニーランドの「ホスピタリティ」に着目した。そして、ウォルトが唯一実際に手がけたカリフォルニア州アナハイムのディズニーランドで、ホスピタリティの精神が受け継がれているのか自分の目で確かめたいと思い、研究旅行制度に申し込んだ。

● 「サービス」と「ホスピタリティ」の違い

サービスの語源は、ラテン語の Servus（奴隷）である。それが、英語の Slave（奴隷）Servant（召使い）という言葉から発展した。サービスは語源の通り、サービスを受ける

立場が主であって、サービスを提供する方は従ということで、主従関係がはっきりしていると言える。

一方で、ホスピタリティの語源は、ラテン語の Hospicis（客人等の保護）である。それが英語の Hospital（病院） Hospice（ホスピス）と様々な言葉に発展した。これらは対価を求めているのではなく、おもてなし・喜びを与えることに重きをおいている点がサービスとは大きく異なる。ホスピタリティにおいて重要視されるのは、人間性や信条、個性、感性などであり、報酬を求めての行動ではない。おもてなし・喜びを通じて、報酬は結果としてついてくるという考えである。

● ディズニーランドにおける「ホスピタリティ」（実際行って分かったこと）

◆ 運営の基本理念「SCSE」に則った安全性重視

ウォルト・ディズニーは、「夢と魔法の国」の実現のため、ゲストの感動を呼び起こすオペレーションを徹底するため、基本的な運営方法のスタンスを決め、それらに優先順位をつけた。

それが「SCSE」で、「S」（=Safety）は安全性、「C」（=Courtesy）は礼儀正しさ、「S」（=Show）はショー、「E」（=Efficiency）は効率を表している。S～Eの順に優先順位がついていて、何よりもまず安全性が優先される。



◆ メンテナンスの徹底

ディズニーランドでは事故が絶対に起きないように、パークが営業している間にもメンテナンスを定期的に行っている。私たちが行った時も、スプラッシュマウンテンやジェットコースターは人が乗っていない状態で、何回も試し運転がなされていた。お客様をお待たせすることになってしまうが、安全性を最優先するディズニーランドの考えに則ったものであった。

◆ 利用ガイドに注意事項

ディズニーランドでもらうことができるパーク内の利用ガイドにも安全に楽しむための方法が4つ記載されていた。

1. 走り回らないこと
2. 乗物から身体を出さないこと
3. 乗物内で暴れないこと
4. アトラクションで黄色の安全ラインを超えないこと

当たり前のことだが、再度確認してもらうため、また子どもにも分かりやすいよ

うに書かれてあって本当に安全を第一に考えていることが分かった。

- ◆ 「スリルライド」の制限

一般に、ジェットコースターは重力が2Gになる。つまり、体重が2倍になるので、安全が確認できる人しか乗せることはできない。そのため、ディズニーランドにあるジェットコースター系の「スリルライド」には、身長制限を設け、また持病を抱えている方、妊婦の方、具合が悪い方は乗れないようになっている。そのことは、利用ガイドや乗り物に並ぶ前の入口に書いてあった。

- ◆ 衛生管理

ディズニーランドでは食べ物の持ち込みが禁止されていた。現実社会のものを持ち込んでしまうと、「夢と魔法の国」が崩れてしまうという理由もあるが、食べ物が腐り、食中毒になる危険性を回避するためでもある。パークに入る前に一人一人荷持のチェックがあった。東京のディズニーランドでは、飲み物の持ち込みも禁止されていたような気がしたが、アナハイムのディズニーランドでは食べ物だけであった。

- ◆ 外国の人へのサービス

ホスピタリティとは、どこの国の人でも、年齢や性別、あるいは職位や家柄などに関係なく対応することである。そのため、ディズニーランドでは海外からのお客様にも楽しんでいただけるサービスがあった。これらは利用ガイドに説明、マップに場所が書いてあった。

- ◆ 翻訳機

ゲスト窓口があって、そこへ行けば無料で翻訳機を貸してもらえる。好みの言語でショーやアトラクションを楽しむことができる。

- ◆ 言語別利用ガイド

メインストリートに入ってすぐのあたりにゲスト窓口があり、そこには言語別の利用ガイドが置いてあった。

全て日本語で書いてあって非常に便利であった。

- ◆ 多言語対応

英語以外の言語を話すキャストは、名札の下に対応言語が明記されていた。日本語を話せるキャストもいた。



日本語の利用ガイド↑

- ◆ 清潔さ



清潔なパーク内↑

ウォルトは、ゲストに非日常の世界を体験してもらうために、パーク内の清潔さに最もこだわった。私が行った時も、いたるところで掃除をしているキャストとディアルと呼ばれるキャストを見かけた。ゴミが落ちていると感じることは一度もなかった。また、

ディズニーランドは、ウォルトが作ったアニメーション映画のストーリーをもとにしたものをゲストに見せる舞台である。そのため、掃除も「ショー」なのである。掃除をショーの一部にするために、しゃがみ込んで掃除をしてはならないようになっている。皆ほうきとちりとりを持っていて、腰をかがめている人はいなかった。掃除にまで演出が施されていてすごいと思った。

◆ 実際にキャストたちを観察して感じたこと

今まで述べてきたことは、お客様に満足していただくおもてなしをするためのマニュアルが実践されていたかを確認したものである。それらは、アナハイムのディズニーランドで守られていると感じた。しかし、最高のホスピタリティとは、マニュアルを超えた接客ができることだと思う。例えば、お客様から言われる前に望んでいることができたり、お客様の動きに注意して、すぐに対応できたり。お客様のことを第一に考えて、キャスト一人一人が行動できるかが最も重要なことである。東京ディズニーランドでは、全てのキャストがモチベーションが高く、どんな時も元気で、こっちが圧倒されてしまうくらいである。しかし、正直なところ、アナハイムのディズニーランドでは最初、東京ディズニーランドほどキャストが明るいという印象もなかったし、丁寧さもあまり感じられなかった。キャスト同士が固まって話している姿をよく見かけた。だが、慣れてくるとおおらかなさが伝わってきて、接客に関して不快に思うことは一度もなかった。アメリカという国が全体的におおらかな人が多い感じがしたので、あまり小さいことは気にしないのかなと思った。東京は、若いキャストが多く、ゲストの気分まで明るく変えてしまうような接客という印象で、アナハイムは、比較的年配のキャストが多く、ゲストも落ち着いた気分になる印象を受けた。それぞれに違いがあるが、それぞれに特徴があって、勉強になった。

● カリフォルニア州の飲食店での接客の印象



私たちが滞在したホテルは、ロスアンゼルスを中心部にあったため、ロスの周辺で食事をするが多かった。飲食店でも、店員の接客を気にして見ていた。テーブルに一人決まった人が接客してくれ、その人にチップを渡すのが普通だった。比較的どの店の店員も、明るく気さくに話しかけてくれて、気を配ってくれた。

しかし、一度不快な想いをしたことがあった。最初は、誰が担当の人か分からず、違

う店員に注文したら不機嫌そうに「何かあるなら私に言え」と言われた。また、他のテーブルも担当していて忙しいのかもしれないが、笑顔もなかった。最後の会計の際も、チップを渡すのを催促され、少ないとまで言われた。料理はとてもおいしかったのだが、また行きたいと思えなくて非常に残念だった。飲食店には物を食べに行くのだが、私は店の雰囲気や店員の対応も一緒に味わっていると思っている。そのことを改めて考えさせられた。

それ以外は、嫌な気分になることなく、とてもいい気分ができた。アメリカ人は笑顔が自然で本当に素敵だなと思った。日本では接客において、どちらかというと丁寧さが求められる気がするが、アメリカでは明るい雰囲気づくりが重要な感じがした。

● 全体を通して

今回、ディズニーランドの「ホスピタリティ」に着目して研究したが、接客というのは、実際に自分がその人たちを見て、接客を受けなければ分からないことがたくさんあった。事実、本やネットで調べたお客様をおもてなしするための環境づくりは、アナハイムと東京で似たものがあったが、キャストたちの対応は全然違った。どちらが良く、どちらが悪いということはなく、ウォルトのホスピタリティの精神は、それぞれの文化に合った形で受け継がれていると思った。



アトラクションだけが楽しくても、パーク内が汚れていたり、キャストの対応が悪かったりすると、こんなに多くのリピーターを生むことはないだろう。ウォルトが言っていたように、お客様は「カスタマー（顧客）」ではなく、「ゲスト（招かれた賓客）」なのだと思い、相手を尊重し、大切にすることをキャストがいるからこそ、ゲストたちは感動し、ディズニーランドには毎年多くのゲストが訪れるのだろうと思った。

また、接客において重要なのは、作り笑顔ではない心からの笑顔なのだ実感した。自分の利益のためでなく、お客様のことを思う気持ちが自ずと笑顔を生むのだと感じた。今後のアルバイトや将来の仕事に活かしていきたいと思う。ウォルトのホスピタリティの精神が生まれた原点であるアナハイムのディズニーランドへ行けたこと、アメリカ人の接客を学べたことは私にとって本当に意義のあるものになった。この場を借りて、先生方、家族へ感謝の意を表したい。

最後に、ほとんどのゲストを満足させられるディズニーランドというエンターテインメントパークは、本当に「夢の国」であると思った。

ディズニーランドにおける非日常世界の魅力

13AR202 吉村美貴子

1、研究概要

私は、ウォルトが生み出した数々の作品がディズニーランドというひとつの世界のなかでどのように共存しているのか調べた。まず、ディズニーランドパークは8つのエリアに分けることができる。そこで私が感じたそれぞれのエリアの魅力やそこでのキャラクターがどう生かされているのか、またウォルトのゆかりの地にも焦点をあて、彼の制作に至った経緯についても述べたい。



上の絵がディズニーランドパークの見取り図である。入口は一つしかない。映画を途中から見たのでは、ストーリーの流れが分からないというのがウォルト・ディズニーの考えであった。どの客にも同じところから入場させ、ディズニーランドでの一日を一つのまとまったストーリーとして演出したいと願っていた。入場者はここでまず、異なる時代に突如足を踏み入れ、現代の実生活感覚から切り離される。「メインストリートUSA」はウォルトが幼い頃に住んでいたミズリー州のマーセリーンの大通りを再現したもので、「古き良き時代」のアメリカの姿を彷彿とさせる。

2、パーク内構造

ウォルトが愛したおとぎの国

ファンタジーランド

おとぎ話のキャラクターが勢ぞろいするエリア

●アトラクション

ピノキオの冒険旅行...大クジラの腹の中に呑み込まれた人形の少年が脱出し、妖精の魔法で人間になる。

不思議の国のアリス...ウサギの巣穴から地下世界に落ちてトランプの女王に首をはねられそうになるものの地上戻る。



▲眠れる森の美女の城

ファンタジーランドのアトラクションの大半は、勧善懲悪の昔話や童話を題材にとっており、善が悪の追跡から逃れて安全な世界に戻るといった基本的な筋立てになっている。ここで悪を代表するのは魔女、トランプの女王、海賊船の片足の船長、サーカスの団長といった魔法や権力、邪心を持った醜い大人であり、一方の善は美しく純真な子供である。これらのアトラクションを体験する老若男女の客達は、入念に仕掛けられたディズニーの魔術によって「あらゆる年齢の子供」に変身し、全員が一緒になって邪悪な大人に追われる子供の役割を演じる。どの物語においても子供の味方となるのは、妖精やこびと、森の小動物、昆虫といった空想上の小さな生き物で、それらの助けを借りて子供たちは最終的な勝利をおさめる。わたしはこの「ファンタジーランド」には幼稚園生、小学生のときにみた作品のキャラクターが多く、おとぎの国という印象を受けた。

科学と空想が織りなす未来の世界へ

トゥモローランド

車や飛行機など、子供が大好きな乗り物がたくさん集まるエリア

●アトラクション

ここには「ファインディング・ニモ・サブマリン・ヴォヤッジ」や「スター・ツアーズ」、「バズ・ライトイヤー・アストロブラスター」といった3DやCGを駆使したアトラクションが多くある。トゥモローランドという名の通り未来型エリアだった。

開拓精神が息づく古き良きアメリカの世界

フロンティアランド

19世紀アメリカ開拓時代をイメージしたエリア

このエリアは、ミシシッピ以西の大平原や鉱山地帯を再現している。「アメリカ河」はミシシッピ河のイメージを再現したものであり、そこに走らせた真っ白な蒸気船は『蒸気船ウィリー』の延長線上にある。わたしは、このエリアに来て左写真の「マーク・トゥエイン号」を見たとき感激のあまり叫んでしまった。マーク・トゥエインとは『トム・ソーヤの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』といった有名な小説を書いた作家であり、ウォルトの生涯の英雄であった。ウォルトが幼年期を過ごした田舎町マーセリンが、偶然にもトムやハック少年の冒険の舞台からそう遠くない所にあったことも、ウォルトがトゥエインに親近感を抱いた要素だったかもしれない。この蒸気船の名前からこの国民的作家に寄せたウォルトの並々ならぬ想いが感じられる。また、ウォルトは河の中洲に「トム・ソーヤ島」と呼ばれる冒険の世界を作ったが、これはディズニーランドのなかでウォルト自身がすべての設計を行った唯一の場所であったと伝えられている。



メインストリートUSA

古き良きアメリカの町並みを再現したエリア

このエリアはパークの玄関口であり、歴史がたくさん詰まったエリアである。このエリアに関しては研修旅行に行く前から一番興味があったエリアであった。まず注目して見たのはメインストリート USA の建物である。ここに並ぶ建物は、実際よりも高く見えるように、2階が1階よりも短く造られている。ストリーートの奥にそびえる城にもそのテクニックが使われているという。また、ストリーートの入り口に近い方の店は高く、奥の店になるほど低く作られている。これもストリーートをできるだけ長く見せるためであって、逆に城側から見たストリートは実際より短く見える。自分で感じながら歩いてみようとはしたけれどあまりよく分からなかった。しかし、ウォルトが少年時代に過ごしたミズリー州マーセリン市のような雰囲気を感じることができてよかった。他にも、メインストリート USA



にならぶ店の窓にはパーク建設に功のあった人々の名前が書かれている。ひとつひとつ



見ていきたかったのだがたくさんあるので断念した。その代わりショップに売ってあった“WINDOWS ON MAIN STREET”という本を買ったのでこれから読み進めたい。

左の写真は、ウォルトがパーク建設をしていた頃しばしば泊まっていた場所である。1階は消防署になっていて2階がその部屋であった。内部は非公開だが、調度品は当時のまま残っているらしい。今でも部屋の窓からほのかに灯りが見えるようになっている。これは当時、部屋の灯りをつけておくことで彼がパークに来ているように見せて、工事に携わる現場の人々の気を引き締めさせたのだといわれている。確かに灯りがついているのが見えた。

ジャングルと古代遺跡が待つ大冒険

アドベンチャーランド

トロピカルな森が広がる冒険の国

●アトラクション

魅惑のチキルーム…1963年、当時では最先端科学だったオーディオアロマトロンクス技術を導入した最初のアトラクションである。それまでアトラクション内に冷房は入っていなかったが、地下のコンピューター室を冷やすためにエアコンを設置していたため、どうにかゲストも涼めないかといウォルトの提案で、初の冷房完備のアトラクションとなったそうだ。音(オーディオ)、動き(アニメーション)、電子工学(エレクトロニクス)の三要素を結合させたこのアトラクションは、ポリネシアの神「チキ」と、熱帯の鳥や花たちがラテンのリズムで歌いだす。

ジャズのリズムが誘う南部の陽気な街

ニューオーリンズ・スクエア

ジャズの本場、ニューオーリンズがテーマのエリア

このエリアはウォルトが休暇先として大好きな場所で、妻のリリアンとよく訪れていたニューオーリンズを再現している。ニューオーリンズ・スクエアは、そんな彼らのお気に入りの街を再現したエリア。19世紀の街並みをイメージして作られている。ここには、ウォルトの家族やプライベートゲストが宿泊したスイートルームや、クラブメンバーしか入れない高級クラブ「Club 33」などが



ある。ここは他の場所とは違い、心が澄む場所であった。パステルカラーのかわいらしい建物が並んでいたり、たくさんの花が咲いていた。建物の塗装がはげたところや錆によるしみのようなものがあつた。しかしそれは「エイジング」と呼ばれる映画のセットで使われる技術を用いたものであるということが後から分かつた。このような建築の細かい再現の工夫もわたしがウォルトを崇拝する一つの理由である。

ミッキーのトゥーンタウン

クリッターカントリー

このエリアには誰もが知っているようなディズニーの有名なキャラクターがたくさんいた。

トゥーンタウンに関しては、全体的に建物が低く感じられた。ミッキーやミニーの家もあり、3Dの映像や人工の動く人形ではなく着ぐるみの生きた人間が入つたキャラクターに会うことができるエリアである。小さな子供を連れた家族にはとてもいい場所であるように見えた。

クリッターカントリーに関しては、緑と森の動物たちがたくさんで、カントリーミュージックが流れ、のんびりした雰囲気エリアであつた。

3、おわりに

私は、実際に本場のカリフォルニアのディズニーランドを訪れて、トゥーンタウンは別としてそれぞれのエリアのキャラクターがそのエリアのカラーを引き立てていた。それはキャラクターだけでなくキャストのコスチュームにもいえることであつた。また、各エリアにはそのエリアに合つたキャラクターが配属されていて、同じ系統の作品のキャラクターが存在していた。分かりやすい例がファンタジーランドのキャラクターである。シンデレラやアリス、ピノキオなど私の感覚でいうと昔からあるキャラクターがたくさんいた。また、さらに分かつたことは、共存しているのはキャラクターだけでなく、天然・人工問わず木の一本、草の一本、あるいは地面も山も人間も動物もそれぞれが調和がとれていることである。無駄なものなど何一つなく作られていることが実際に行つてみてわかつた。

4、今後の展望

私は、ディズニーランドにおけるノスタルジアをテーマに卒業論文を書いていきたいと考えている。そこで今回実際にカリフォルニアのディズニーランドを訪れてみて、さらに建築技法にも興味が湧き、深く知りたいと思うようになった。これからは買つてきた文献を読んだり、東京のディズニーランドへも訪れてみて比較もしていきたい。

おわりに・・・



今回この研究旅行で私たちが得たものはとても大きい。ウォルト・ディズニーが作り上げた世界を実際に知り、改めて彼の存在の大きさを再認識した。彼の精神については私たち五人がそれぞれ違った受け取り方をしていた。互いに考えた意見を何度も交わし、一人では決して考えつかないような事もたくさん見出すことが出来た点は、今回のこの研究旅行を五人で行くことが出来た最大の利点だと思っている。

彼の残した業績や言葉は今もなお受け継がれ、世界の中の人を魅了している。なによりも、ディズニーのテーマ

パーク内で大人から子供までたくさんの人々が、こぼれるほどの笑顔を振りまいている姿を見て、ここは誰もが楽しめる彼が目指した本当の夢の国であること、そして、彼は真のエンターテイナーであるということを実感した。

また、今回の旅では個人の調査課題も掲げていた為、各自が新しい発見と今後の研究分野の方向性を明確にすることが出来たと思う。

この研究旅行の実現に向けて何度も計画を練り直し、渡米するにあたって様々な手配など多くの時間を費やした。時には互いの意見がぶつかり合うこともあったが、その経験が、私たちを一回りも二回りも成長させてくれた。そしてこのような貴重な経験をさせて頂いたことに本当に感謝したい。お世話をして下さった先生方本当にありがとうございました。